



高松塚古墳石室解体事業 完了から10年

国宝高松塚古墳壁画を古墳から取り出し修理するため、同古墳の石室解体事業が実施されたのは2006年10月から2007年9月にかけてのことでした。高松塚古墳壁画は1972年の発見以来、35年間にわたって現地保存の努力が続けられてきましたが、カビ等の微生物被害が後を絶たず、2005年6月の「国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討会」において、壁画を石室石材ごと取り出し修理することが決定されました。石室解体事業では、奈良文化財研究所が文化庁の委託を受けて発掘調査や石材の取り上げ、搬送作業をおこないました。早いもので事業が無事に完了してから本年で10年の節目を迎えました。

この10年間、奈文研では引き続き高松塚古墳の恒久保存対策事業に従事してきました。古墳の仮整備事業や、壁画や石材の状態・材料調査を実施するとともに、膨大な発掘データの整理作業を進めてきました。そして本年5月末には、『特別史跡 高松塚古墳発掘報告—高松塚古墳石室解体事業にともなう発掘調査—』を刊行することができました。

10年前の発掘調査では、石室解体事業によって失われる考古学的情報や壁画の保存環境に関する情報を細大漏らさず収集すべく、通常の記録作業のほかにも、三次元レーザー測量やビデオ撮影、版築層の

はぎ取り・切り取り、遺構の型取り、拓本等、ありとあらゆる方法を駆使して調査成果を記録しました。報告書ではこれらをふまえて、墳丘や石室の規模と構造、版築による墳丘の構築手順、梃子穴を用いた石室の組立て方法、朱線や水ばかりを用いた高度な石材加工技術等、高松塚古墳の築造技術について詳述しています。また壁画の保存環境についても、劣化の遠因となった墳丘内の地震痕跡や石材の損傷状況、石室周囲のムシの生息状況、石材の外面や接合面の汚損状況を、図や写真を交えて報告しています。

この報告書の刊行を受けて、飛鳥資料館では10月6日から12月3日まで『高松塚古墳を掘る—一解明された築造技術—』と題して10年前の発掘調査を振り返る特別展を開催しました。展示室には、版築層のはぎ取り・切り取り標本、石室や地震痕跡の実物大模型、石材の取り上げに使用した治具等が所狭しと並び、迫力ある展示は多くの来館者から好評を得ました。

石室解体事業完了から10年。壁画の修理作業は順調に進んでいますが、地震で亀裂が生じた石室石材の強化処置、粗鬆化が進む漆喰の修理方法、壁画修理完了後の壁画と古墳の整備活用方法等、検討すべき課題もまだ数多く残されています。奈文研では、今後も高松塚古墳壁画の保存と活用に向けて、調査研究に邁進していく所存です。

(所長 松村 恵司／都城発掘調査部 廣瀬 覚)



石室解体事業にともなう発掘調査報告書



飛鳥資料館秋期特別展『高松塚古墳を掘る』の様子